



TITLE:

<6>おわりに

AUTHOR(S):

---

CITATION:

<6>おわりに. 京都大学高等教育叢書 2007, 25: 157-158

ISSUE DATE:

2007-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54060>

RIGHT:

## VI. おわりに



## VI. おわりに

平成 18 年度の本取組は、これまでのプロジェクトを実質化するものであるとともに、大きく拡張するものでもあった。私たちは、本年度、工学部とセンターとの連携を深め実質化するとともに、連携の輪をおおきく拡大することとなったのである。

工学部との連携が実質化され着実な成果をもたらしつつある点については、工学部の関連する教員ならびに事務の方々、わけても、研究科長西本清一教授、新工学教育プログラム実施検討委員会委員長湯浅太一教授をはじめ委員の方々、教務事務の方々に、深い感謝をささげたい。さらに、FD 研究検討委員会の発足については教育担当理事東山紘久教授や学生部の担当者の方々に、関西地区 FD 連絡協議会の発足については関連大学の出席者の方々、わけても発起人を引き受けていただいた圓月勝博教授（同志社大学）ならびに矢野裕俊教授（大阪市立大学）に感謝の言葉を記しておきたい。最後に、本プロジェクトがこのような実質化と拡張を遂げるにあたって少ない人数で奮闘してくれている京都大学高等教育研究開発推進センター第 1 部門の教員スタッフ、事務スタッフ、さらにこれらの仕事をいつもバックアップしていただいている全学共通教育部の担当事務スタッフにも、感謝の意を示しておきたい。

本取組は、このような実質化と拡張を受けて、19 年度に最終年度を迎える。私たちは、最終年度にふさわしい展開と総括を実施する予定である。ところで、「GP 日誌」に記述されているように、18 年 12 月 20 日にこの取組について 4 時間に及ぶ「特色 GP 実施調査」を受けた。この準備と当日のヒアリングはともに、本取組にとってきわめて有益な作業であった。このヒアリングでも、「相互研修型 FD の組織化」という取組は、各大学が＜FD の日常化と無意味化の進行するさなかでの FD 義務化＞という難しい事態に直面している今日においてこそ有益であることが、あらためて確認された。私たちは、本取組が、来年度での終結を超えて、何らかの形で持続される方途を、積極的に求めていくつもりである。